令和７年度

連携活動記録報告書

ＶＯＬ．　１６

令和８年２月

山形大学附属学校

はじめに

山形大学附属学校園では、4 校園相互の連携を強化し、校種間の円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行うことを目的として、「山形大学附属学校研究・連携推進委員会」の下に、「共同研究推進部会」・「幼・小・中連携部会」・「特別支援連携部会」の 3 つの部会を設置しています。「共同研究推進部会」の活動については『大学と附属学校園の共同研究報告書』として報告しています。本報告書は、令和 7 年度の「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の活動の記録をまとめたものです。

山形大学附属学校園では、子どもたちの交流活動や連絡会、研修会などを通じて、教員が互いの教育現場を参観し合い、意見や情報を交換しています。その中で、各校園の教育目標に応じた特徴を持つ教育実践に基づいて、附属学校園としての新たな連携の在り方を意識した教育方法の検討に取り組んでいます。また、山形大学附属学校園には、特別支援教育コーディネータとメンタルケア・コーディネータ（平成２３年度から）及び英語教育コーディネータ（平成２７年度から）が配置され、「まつなみ学習支援室」（平成２４年設置）とともに教育支援を行ってきました。これに加えて、教育情報化推進コーディネータ（令和５年度から）を配置し、教育活動の情報化を進めているところです。令和６年度には山形大学附属学校運営協議会を設定してコミュニティ・スクールとしての活動を開始し、附属学校という特性を活かして、４校園が多面的に連携した教育実践の追究に取り組んでいます。

山形県は令和７年度に「ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる持続可能な社会の実現を担う山形の人づくり」を目標とする第７次山形県教育振興計画（7 教振）をスタートさせました。7 教振では「体験」「探究」「尊重」「協働」の 4 つへのチャレンジに、県民みんなで取り組んでいくことを提案しています。山形大学附属学校園は、従来から「挑戦」を大事にしてきました。山形県教育委員会の教育振興計画を強力に推進する一つの核になることができます。それぞれの校園での学びの特徴を生かして、子どもたちのいろいろなチャレンジを支援していきたいと思います。また、教職員のチャレンジも支え、附属学校園に関わる人たちみんながウェルビーイングであるような連携の在り方を追究していきます。

教育が直面している様々な課題への取り組みは、地域の公立学校のモデルとして全国の国立大学附属学校に要請されているものです。山形大学附属学校園における連携活動が、単発的な交流活動に止まらず一貫した教育理念に支えられた実質的なものになるよう、今後も４校園の連携の在り方を模索していくことが大切だと考えています。

本報告書をご高覧いただき、忌憚のないご意見や御要望をいただければ幸いです。

令和８（2026）年 2 月

山形大学附属学校運営部長　　三浦　登志一

目 次

はじめに ・・・・ 1

Ⅰ 連携活動の記録

令和７年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 ・・・・ 3

令和７年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題 ・・・・ 6

令和７年度の活動を振り返って ・・・・ 7

１ 幼小中連携

（１）幼小連携 ・・・・１５

（２）幼中連携 ・・・・１８

（３）小中連携 ・・・・１９

２ 特別支援学校連携 ・・・・２０

Ⅱ 研究・連携推進委員会規程

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程 ・・・・２７

Ⅲ 資料

附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める

部会に関する申合せ ・・・・３０

附属学校研究・連携推進委員名簿 ・・・・３２

Ⅰ　連携活動の記録

令和7年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その１

附属小校長　早坂　和重
メンタルケアコーディネータ（中学校籍　教諭）　山路　一哉
特別支援教育コーディネータ（特別支援学校籍　教諭）　藤本　沙織

１　配置のねらい

附属学校園の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇教育相談と特別支援教育にける校種間の連携及びその一貫性の推進
◇附属学校園で特別支援を必要とする幼児・児童・生徒への支援の充実と体制整備の推進
◇附属学校園で心の問題を抱える幼児・児童・生徒への支援の充実と体制整備の推進

２　主な職務

◇幼小連携、小中連携における継続した支援・指導の中核
◇学級担任や教科担任、養護教諭への専門性を生かした支援
◇各校園の教育相談担当者・特別支援コーディネータ・養護教諭との連携
◇まつなみ支援室における支援員への専門的な助言及び教職員の資質向上を促す研修実施

３　今年度（配置15年目）の基本的な考え方

【目　標】
◇早期支援の立場から幼稚園における支援や適正な就学指導に生かす機能強化を図る。
◇各校園でコーディネータおよびスクールカウンセラーを積極的に活用した組織的な支援体制の充実を図る。
◇個に応じた支援のあり方（当該児童・生徒または保護者、担任支援も含む）を探究する。
◇年齢に応じた発達課題を整理し、幼から中までの12年間継続して課題解決を図る。
◇まつなみ学習支援室の支援員を中心に、別室での学習や取出し指導の充実を図る。
【役　割】
◇附属学校園の課題を把握し、各校園の担当者と一緒に校園間をつなぐ。
◇各校園の担当者と連携し、各校園の課題解決に向けて指導及び支援を行う。
【具体策】
◇各校園の状況を把握し、幼児・児童・生徒の情報をつなぎ、一貫性のある指導・支援を行う。
◇専門的な情報を収集・整理し、各校園の教員への情報提供及び研修等を通して指導する。

４　今年度の成果（〇）と課題（▼）

〇中学校入学に伴い、登校に不安を抱えている児童や保護者と春休み中に面談を実施し、不安軽減のため対策方法の相談やSCとの接続を早期に対応することができた。
〇附属特別支援学校から、児童本人との関り方や家庭との連携などで対応に悩んでいるという相談を受け、中学校のSCにも御助言をいただきながら対応にあたった。
〇幼稚園、小学校ともに、個別の教育支援計画の作成、個別の支援等を各校園で取り組んだうえで、コーディネータが必要な幼児児童について個別に巡回相談に出向き、具体的な支援方法、取り出しでの学習内容等について相談を行った。今後も、必要に応じて巡回相談を活用していく。
〇小学校では、学校全体を巡回し、ユニバーサルデザインについてコーディネータが助言した。教室環境、学級でのルールの確認等、学びに向かう環境作りについて学んだ。
▼不登校児童・生徒やスクールサポートルームを活用する児童・生徒が増加傾向にある中で、悩みを抱える生徒への対応方法やスクールサポートルームの今後の在り方等について、4附の情報共有があまりできなかった。児童・生徒の困り感が多様化してきている中で、附属学校園として対応可能な取り組みや効果的なスクールサポートルームの運営方法などを、4附の状況把握とともに多面的に見直すことができる機会があるとよい。

令和7年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その２

附属小校長　早坂　和重
英語教育コーディネータ（附属小学校籍 教諭）　中村　優太

１　配置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇グローバル化に対応した教育環境づくりの推進として、小学校における英語教育の充実強化、中学校における英語教育の高度化に対応する。
◇附属学校園全体の英語教育における幼児・児童・生徒への支援と英語教育の体制整備、推進、充実を図る。
◇異学校種間の英語教育のあり方に関し、地域のモデルとなる実践を行い、その周知を図る。

２　主な職務

◇附属学校園全体の英語教育における幼児・児童・生徒への支援・指導の充実に向けて大学教官と連携を図り、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
◇小学校での外国語科及び外国語活動の授業において、担任と連携した指導、補助を行う。
◇英語教育の充実、強化・高度化に対応した指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
◇附属学校園全体の英語教育とその支援・指導を行う教員として、幼小中一貫教育を支える。
◇附属幼稚園での英語遊び等を試行し、幼小連携による具体的な実践を促進する。
◇大学・学部等での研修を積極的に行い、英語教育コーディネータとしての資質向上を図る。

３　今年度（配置11年目）の基本的な考え方

【目　標】
◇学習指導要領に基づく外国語科及び外国語活動の指導充実と年間指導計画の策定・更新
◇附属中学校の英語科と小学校の外国語科及び外国語活動の接続に資する連携強化
【役　割】
◇学級担任やALTと連携し、外国語科及び外国語活動の時間を受け持ち、その充実を図る。
◇県や市の研修の講師として、地域の小学校の研究会・研修会等において指導・助言を行う。
◇附属幼稚園および附属小学校低学年の英語遊びの指導
◇附属中学校英語科の授業づくりへの支援（TTでの授業参加）
◇附属小学校外国語科及び外国語活動への中学校英語科教員の参加をコーディネートする。
【具体策】
◇高学年の外国語科および中学年の外国語活動を主に担当する。
◇低学年における英語遊びを複数回担当する。
◇附属幼稚園における年長児の英語遊びを複数回担当する。
◇附属中学校における英語科の授業に参加し、小中連携のあり方を探る。
◇学習指導研究協議会等において、外国語科及び外国語活動の授業を提案する。

４　今年度の成果（〇）と課題（▼）

〇公開研究会等を通じて、附属学校園における英語教育の取組みを発信したり、ICTを効果的に活用した授業を具体的に提案したりすることができた。次年度は、本校の協議会だけでなく、県内の様々な協議会にも参加することで、各校と情報共有を図っていきたい。
〇ALTに加え、市の国際交流員や地域の方と連携した取組みを進めたことで、話す楽しさを実感できる授業の展開につながった。
〇幼稚園と低学年での英語遊びの実践を通じて、幼から小（低学年）の連携モデルのあり方や、幼小中の12年間を見通したカリキュラムの構築について、これからの方向性をイメージすることができた。
▼子ども同士がつながる小中連携の単元を構想し、その具現化を図っていきたい。
▼幼稚園・小学校・中学校のつながりはもてたが、そのつながりがどのような系統性があるのかを、子どもの姿で共有していく必要がある。各校の代表者でそれぞれの学校園の子どもの姿を共有していきたい。
▼幼稚園・小学校・中学校のかかわりに加え、特別支援学校とのかかわりをもっと増やしていくことで、コミュニケーションで大切にしたいことを子どもたちが実感できるようにしていきたい。

令和7年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その3

附属小校長　早坂　和重
教育情報化推進コーディネータ（附属小学校籍 教諭）　奥山　恭平

1 配置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇小学校におけるICT教育の充実・強化、中学校におけるICT教育の高度化を目指し、教育情報化に対応した教育環境づくりを推進する。
◇附属学校園全体の ICT 教育における幼児・児童・生徒への支援と ICT 教育の体制整備、推進、充実を図る。
◇ICT教育のあり方に関し、地域のモデルとなる実践を行い、その周知を図る。

2 主な職務

◇附属学校園全体のICT教育における幼児・児童・生徒への支援・指導の充実に向けて関係機関と連携を図り、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
◇小学校でのICTを活用した授業を基盤に、担任と連携した指導、補助を行う。
◇ICT教育の充実・強化、高度化に対応した指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
◇附属学校園全体のICT教育とその支援・指導を行う教員として、幼小中一貫教育を支える。
◇外部での研修を積極的に行い、教育情報化推進コーディネータとしての資質向上を図る。

3 今年度（配置3年目）の基本的な考え方

【目　標】
◇附属学校GIGAスクール構想に基づいたICT活用の具体的指導および支援
◇校務DX化の推進とICTを活用した教員研修モデルの構築に向けた環境整備
【役　割】
◇小学校を起点に、附属学校園全体のICT教育の企画や運営を行う。
◇教員および児童・生徒に対し、ICT機器の活用に関する指導・助言を行う。
◇ICT活用の推進に向け、システムやネットワーク等の環境整備を図る。
◇教務主任や学年主任等と連携し、働き方改革につながる校務のDX化を具体的に行う。
【具体策】
◇教員および児童・生徒を対象に「ICTに関するアンケート」を年間2回実施し、結果に基づいてICT活用の推進に向けた方向性を整理する。
◇教員や児童・生徒の求めに合わせたICT活用について助言したり、効果的な活用のあり方を提示したりする。
◇「学びカフェ」の設計や導入する機材等を選定し、教員の研修の場を整備する。
◇校務のデジタル化を推進し、可能なことから順次整備する。

4 今年度の成果（〇）と課題（▼）

〇各学校園において、ホームページのリニューアルや教職員用端末の Microsoft 化などに伴い、様々な更新作業や状況確認が必要となった。学校園全体で進めるものとして、進捗状況を確認したり、情報共有をしたりすることができた。
〇小学校の「学びカフェ」を活用し、ICTを活用しながら気軽に研修できる環境づくりを進めることができた。
〇紙媒体で実施してきた様々なアンケートを見直して Google フォームを用いたものに変更したり、校務のDX化を推進したりすることができた。
▼今後は、小学校での実践を附属学校園全体で共有するとともに、各校園の取り組みや課題について情報交換し、これからのICT教育の方向性を整理していく。

令和7年度　附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題

附属小校長　早坂　和重

1　設置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児・児童・生徒への支援充実と体制整備の推進を図る。

◇附属学校園の特別支援教育並びに教育相談機能の一層の充実と活用を図る。

◇県内小学校の発達障がい児等通級加配校のモデルとなる研究・実践を積み重ねる。

2　主な職務

学級担任、各コーディネータ、SC（必要に応じて、中学校のSC及び大学の心理教育相談室のスーパーバイザー）、管理職（校長・教頭）と連携して主に以下の職務を行う。

◇学習面、生活面での支援（行動観察、TT指導、取り出し個別指導、諸検査の実施）

◇メンタル面での支援（教育相談、アドバイス等）

◇保護者との面談、教育相談

◇研修会等の周知・啓発活動の計画・実施

3　支援室の運営

【室　長】 小学校まつなみ支援室長　　吉田　美有紀　教諭（附属小学校在籍）

【副室長】 小学校まつなみ支援副室長　　熊倉　絵里子　教諭（附属小学校在籍）

【メンタルケアコーディネータ】　　山路　一哉　教諭（附属中学校在籍）

【支援員】 小学校まつなみ支援室支援員　　小林　明日香　支援員（週5日5h 勤務）

【スーパーバイザー】 川村　修弘氏　　佐藤　宏平氏　（山形大学地域教育文化学部教授）

4　今年度の成果（〇）と課題（▼）

〇附属学校園間の情報共有が迅速かつ的確に図られ、特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への継続的な支援が充実してきている。

〇室長と支援員、該当学級の担任が日常的に情報交換を行うことで、個々の特性や状況に応じた支援を計画的に行うことができた。

〇個別の指導計画及び保護者の了解を得た教育支援計画に基づいて支援を行い、本人及び保護者の安心感・信頼感の醸成につながっている。

〇室長とSCが連携して児童や保護者との面談を計画的に実施したり、授業の様子をもとに適切な助言を行ったりすることで、児童及び保護者、教員の安心感につながった。

〇今年度、特別支援教育コーディネータの小学校勤務がなくなったが、特別な支援を要する児童の対応について、必要に応じて小学校にお越しいただき、助言をいただいた。

▼学校や学級への登校が難しい児童に対して、本人、保護者、学校が長期目標を共に考え、より充実した指導計画を作っていく必要がある。

▼月に一度の子ども研究部会では、各学年からの情報を共有することができた。一方で、今年度は、共有することにとどまってしまったので、ケース会議のように、具体的な手立てを話し合ったり、実際に取り組んでみて一か月後にどのように変化したのかを検証したりしていきたい。

令和７年度の活動を振り返って

メンタルケアコーディネータ　山路　一哉

１　活動報告

（１）特別支援教育コーディネータ及び附属小学校の教育相談担当との連携

・新入生の小学校時の生活の様子や人間関係、これまで行ってきた支援について情報提供をいただいた。
・小中学校に兄弟姉妹が在籍している生徒について必要に応じて情報交換を行った。
・中学校の生徒の様子について、必要に応じて情報提供を行った。

（２）中学校スクールカウンセラーとの連携

・カウンセラーに相談者の困り感を事前に伝えたり、カウンセリング後に相談者から了解を得た内容について聞き取ったりして、支援方法を検討した。
・７月に中学１年生を対象にスクリーニングを実施し、生徒への支援方法について助言をいただいた。
・２名のカウンセラーから、豊かな心の育成のために重要となる知識や考え方について、生徒の発達段階に応じて内容を分けて講話をいただいた。

「友だちの作り方」　「心がつらい時の対処法」　「ネットとの付き合い方」　「アサーションについて」　「受験期の心の整え方」等

・Ｑ－Ｕアンケート分析会に講師として招き、結果の活用方法および支援の仕方についてアドバイスをいただいた。

（３）中学校の学級担任・教科担任との連携

・「スズキ校務」を活用し、適宜、生徒の様子やスクールカウンセラーからのアドバイス等を記録し、担任や学年担任団に情報提供した。
・担任、学年担任団との情報交換を積極的に行い、困り感のある生徒の対応について検討した。また、状況に応じて校長や教頭に報告し、ＳＣに繋いだりケース会議を開いたりした。
・学級全体や特別な支援が必要な生徒への支援方法について確認し、指導にあたった。
・教室に入ることに抵抗感がある生徒に対し、必要な学習支援について教員間で確認したり、授業に出られるような対応策を検討したりした。
・教育相談アンケートを受けて、学年団と協議し、必要に応じて生徒から話を聞いた。

（４）教育相談部会の実施(中学校)

・年度当初に教育相談の年間計画を作成し、教育相談アンケートやスクールカウンセラー講話、エンカウンター（ＳＧＥ）、ソーシャルスキルトレーニング（ＳＳＴ）などを計画的に実施できるようにした。
・部会を月２回設け、生徒の情報交換を行い、必要に応じて支援策の検討を行った。
・教育相談アンケートを年４回実施し、生徒の状況や悩みなどを把握し、必要に応じて面談等で対応した。
・Ｑ－Ｕアンケートを年２回実施するとともに、学級や個々の対応につい検討した。

・全職員を対象に生徒理解研修会を実施した。今年度は「子どもにかかわる立場として、知っておきたいLGBTQ＋の基礎知識と対応」について、本校養護教諭が情報提供を行った。

（5）不登校生への対応（中学校）

・ケース会議を実施し、生徒の状況把握と対応策の検討を行った。
・家庭訪問や電話で知り得た情報を学級担任と共有し、対応策を検討した。

（6）校内サポートルームで過ごす生徒への対応（中学校）

・具体的な取り組みを個別に確認し、目標に向かって学習が進められるよう、生徒自身が週ごとに時間割を作成できるようにした。週末には、1週間の振り返りを行い、成果・課題を翌週の生活に活かせるようにする等、主体的に学習と向き合える環境づくりを進めた。
・必要に応じて生徒と面談を行い、心配事や困り事がないかを確認しながら、適宜対応した。
・教室で授業に参加したいという意思が生徒にある時は、学級担任や教科担任と連携を図り、現在扱っている学習内容を事前に伝えることで、不安を軽減したり、予習したりする時間を設けることに繋げた。
・山形大学の学生ボランティアと情報を共有することで、多角的に生徒の心身の変化に気付くことができるため、早期に心理的支援を行えるようにした。
・学年や学校全体の動向に合わせながら、校内サポートルームでもオンラインを活用して学年ごとの活動に参加できるように環境を整えた。
・校内サポートルームを利用している生徒と保護者を対象に、不登校経験のある卒業生との交流会を夏休みに実施した。先輩が中学生時代に考えていたことや現在の目標等を聞くことで、進路や将来像の不安軽減に繋げることができた。

2　成果と課題（成果〇、課題△）

〇小学校からの情報提供を基に、特別な支援が必要な児童・生徒の様子やその支援策について、春休み中に本人・保護者と理解を深めることができ、入学式に全員が参加することができた。
〇不登校や校内サポートルームに通う生徒と学級担任のそれぞれがもつ思いや願いを共有できるよう、情報の橋渡しを心掛けた。そうした生徒の様子や学校の情報を、積極的に家庭に電話をして情報共有することで、担任の負担軽減に貢献できたと感じる。
〇運動会、合唱コンクール等、学校行事への参加体制について、校内サポートルームを利用している生徒と個々に面談をしながら、当日の参加方法について具体的に打合せを行うことで、見通しをもちながら安心して学校生活を送ることができるよう支援することができた。
〇不登校や学習室利用経験のある卒業生との交流は、学校生活や進路、将来設計に不安のある生徒にとって、中学3年生時の学習の様子や、高校選択の幅の広さを知る契機となった。
△不登校の生徒がいる現状として、生徒の心に寄り添うセンター的機能を発揮しなければならないと感じる。学校生活に不安を抱えている生徒に対し、スクールカウンセラーや担任とは違った立場で悩み相談ができる場を設けたり、相談アンケートの回数を増やして悩みや不安の早期発見・対応に積極的に関わったりする等、さらに生徒と先生の安心に繋がる効果的なサポート体制を模索していきたい。
△「まつなみ学習支援室」で情報交換や意見交流をする機会があまりなかった。様々な相談事案が発生した時に迅速に連携を図れるよう、今後も繋がりを意識していきたい。

令和7年度の活動を振り返って

附属学校特別支援教育コーディネータ　藤本沙織

1　主な活動の報告

(1)　附属幼稚園との連携

9月、11月、1月の3回、幼稚園を訪問し、巡回相談を行った。幼稚園の先生方が気になっている幼児(年少、年中)を中心に、普段の生活の様子を参観した後、支援方法等についての相談を行った。登園時、母から離れられずにしばらく大泣きしてしまう、学年の集まりや食事中の立ち歩きが多い、友達の遊びに突然割り込んだり急に抜け出したりするなど関わり方が好ましくない、などの相談があげられた。それらの相談について、自分の様子を客観的にみられるように「〇〇が好きなんだね。」「〇〇が嫌だったね。」などと言葉で伝えること、視覚的情報で座るべき場所や終了時間を示すこと、昼食時の場の設置等について提案した。幼稚園でできることをすぐに実施していただき、相談後の幼児の様子も聞き取りながら、支援方法について検討を重ねてきた。巡回相談と同時に1月の「子どもを語る会」に参加し、その他の幼児についても各学級での様子をお聞きして、学級での対応について相談を行った。個別の教育支援計画作成の必要性の有無についての検討も行ったうえで、必要な幼児については幼稚園で作成していただいている。

(2)附属小学校との連携

9月、12月の2回、小学校を訪問し、巡回相談を行った。9月には、ユニバーサルデザインの視点で学校全体を巡回し、全学級の児童の様子や学習環境等について気付いたことを伝えた。授業中に他のことをしていたり、身の回りや身だしなみが整っていない児童がいたりしたことから、学習に集中できるように教室内の棚の上やロッカーを整理すること、学級全体で机上、身だしなみ、聞く姿勢を整えてから学習を始めることなどについて伝えた。学びの場が適切ではないと考えられる児童についても、今後予想される本児の困り感や、将来までに身に付けたい姿について伝え、今後の適切な学びの場を検討してみることについて伝えた。12月の相談では、小学校の先生が気になる児童(1名)について、参観と相談を行った。いらいらしたときの対応など、課題となっていることだけに注目するのではなく、本人の得意なことを認めながらよい姿を伸ばしていくことや、集中力の短さや文章問題の読み取りの困難さなどの特性に応じた支援を行う必要性を伝えた。また、今後取り出し学習を行い、ソーシャルスキルトレーニング(アンガーマネジメント)を行うとの話から、具体的な学習内容について提案した。気持ちのコントロールの課題については、取り出しの学習だけに任せるのではなく、取り組んだ内容や本人が考えた対応策などについて担任と連携し、取り出しで学んだスキルを自分のものにしていくことが大切だということを伝えた。

(3)特別支援学校でのケース会の実施

担任から要望が出た児童生徒について、校内ケース会を年間7件実施した。現在の状況、今後の目指す姿をあげたうえで、それに向けた具体的な支援策を検討した。学部教員だけでな

必要に応じて他学部の教員も参加して意見を出し合うことで、現学部卒業後の姿も考えながら話し合うことができた。ケース会実施から約1か月後に振り返りの会を実施し、成果や課題、その後の支援策についても話し合ってきた。

不登校の生徒については、附属中学校のメンタルケアコーディネータを通じてスクールカウンセラーから助言をいただいたり、主治医や学校精神科医と相談したりしながら、対応について検討をしてきた。

（4）保護者支援

1月、幼稚園において年中児の保護者に向けて講話を行った。「小学校入学を見据えた子育て」というテーマで、これから身に付けたい力、それらを身に付けるための支援について話した。

2　今後の取り組みと課題

（1） 幼稚園、小学校での定期的な勤務がなくなったことで、個別の教育支援計画や指導計画の作成、保護者との面談、取り出し学習や学級内での個別の支援等を各校で行ってもらっている。今後も、必要なことについては巡回相談等で相談いただきながら、各校園の先生方が中心となって、個別の対応ができる体制作りを行っていけるとよいと考える。そうすることで、各校園の特別支援教育力が高まると思われる。

（2） 特別支援学校で取り組んだケース会では、話し合う内容を明確にして実施したことで、各回30分という短時間ですぐに実施できる具体的な支援策について案を出し合うことができた。附属学校園にも個別の支援等を考える方法として紹介できるとよいと感じている。

（3） 特別支援学校内での不登校への相談について、附属中学校のスクールカウンセラーからアドバイスをいただけたことは大変有り難かった。今後も、コーディネータ間で連携を図りながら、専門家からの助言をいただけるとありがたい。

今年度の活動を振り返って

英語教育コーディネータ　　中村　優太

1　今年度の活動の報告

（1）　小学5・6年生における「外国語科」の授業

今年度も、「外国語を通じて、自ら関わりながら相手や他者とつながろうとする子ども」の育成を目指し、子どもにとってコミュニケーションを図る必要感のある目的・場面・状況の設定について、新たな可能性を模索してきた。

5年生では、山形で暮らす留学生と年間3回交流した。自己紹介や校舎案内を行ったり、山形のおすすめの場所や食べ物などを紹介したりする活動を行った。交流する中で、留学生の出身国であるネパール、バングラデシュ、ミャンマーの文化にも触れることができ、世界の国々への興味や関心が高まっていると感じた。

6年生では、今の自分の好きなものや得意なこと、将来の夢などを見つめ直す中で、自己理解を深め、進んで自己表現しようとする姿を目指し、未来の自分へのメッセージを作成する単元を考えた。

単元の振り返りには、「友達と性格やできることについて伝え合って、客観的に自分を知ることができた。」「未来の自分の好きや夢は変わっているかもしれないけれど、今の自分の好きや夢を伝えることができてよかった。」という言葉が見られた。単元を通して、今の自分の「好き」「できること」「性格」「将来の夢」などについて見つめ、未来の自分に向かって英語で伝える活動をしてきたことで、自己理解を促し、伝えたいことを素直に表現する姿が見られた。

（2）　小学3・4年生における「外国語活動」の授業

今年度も、文部科学省作成の副読本「Let’s Try!①②」を主な教材として扱いながら、「聞く」「話す」活動を中心に学習を進めてきた。5・6年外国語科、中学校英語科との系統性を意識しながら、コミュニケーション能力の素地を養うために、様々な言語活動に取り組んだ。

4年生では、「外国語を使って雑談をしてみたい」という子どもたちの思いから学習を進めた。学習をする中で「楽しく話すためには、相手が話したことについて質問をしてみると面白くなるよ。」「今回学んだことって、普段の生活でも使えそうだよ。縦割り班活動でほかの学年の仲間と話すときに、質問をして話が盛り上がるようにしたいな。」と話した。楽しくコミュニケーションを図るためには、自分の思いを伝えたいという思いをもちつつも、相手のことを考えることが大切であることを学ぶことができた。

（3）　小学1・2年生における「英語遊び」

幼稚園での英語遊びの経験が小学校での外国語学習につながるように、年に数回、小学校1・2年生を対象に外国語遊びの授業を行っている。今年度も、様々な国の言葉であいさつをしたり、英語の歌やゲームで遊んだり、「好きな○○」というテーマで自分のことを英語で伝え合ったりする活動を行った。楽しく遊びながら英語に慣れ親しむことで、友達と進んでコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。

（4）　幼稚園における小学生との「英語遊び」

幼稚園の年長児を対象に、英語を使いながら楽しく遊ぶ活動を行った。英語教育コーディネータと共に、英語の歌を歌ったり、「happy」や「hungry」など、気持ちや体の状態を表す言葉について、リズムに乗りながら話してみたり、ミッシングゲームやジェスチャーゲームなどで楽しく慣れ親しんだりした。また、来年度の1年生と6年生のつながりを入学前からもてるように、5年生と一緒に活動をした。「英語でじゃんけん」や「好きな動物を紹介する」など、幼稚園の子どもたちが親しみやすい遊びを英語で楽しんだ。英語を使いながら、友達や先生、5年生と楽しそうにコミュニケーションを図る子どもの姿が見られた。年度末に連携活動を行うことで、年長児が4月から始まる小学校生活への期待感をもつことができると感じた。

（5）　中学校との連携

附属小学校、附属中学校の研究協議会に、小学校担当も中学校担当も互いに共同研究者として参加した。それぞれの協議会で、小学校の学びと中学校の学びがどう結びついていくのかというところについて、参加者と一緒に話し合った。小学校の外国語科・外国語活動でも中学校の英語科でも、子どもたちが「話してみたい」「自分の考えを伝えてみたい」と思えるような目的・場面・状況の設定が大切になることを改めて確認することができた。

2　成果と課題

○　幼小中の12年間を見通した英語教育カリキュラムの構築に向けて、附属中学校や附属幼稚園と連携した実践を行うことができた。また、小学校低学年や幼稚園の子どもたちとの「英語遊び」の授業も行うことができた。

○　ALTだけでなく、山形市の国際交流員や地域人材とも連携した実践を行うことができた。

○　Web会議システムや学習アプリの活用、動画撮影など、ICTを効果的に活用しながら授業づくりを行うことができた。

○　公開研究会や各地区での講話などを通して、附属学校園における英語教育の取り組みを発信することができた。

▼　小中連携について、教員同士の連携に加え、子ども同士がつながることができる単元を構想し、その取り組みを他校に発信していきたい。

▼　幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の外国語担当教員で互いの授業を見合い、情報共有を図ることを通して、目指す子どもの姿を具体的にイメージしていきたい。

活動を振り返って

教育情報化推進コーディネータ　奥山　恭平

1　活動の報告

（1）各学校園との連携

・附属特別支援学校

依頼を受け、教師用 PC および児童生徒用 Chromebook での NHK for School の動作状況について確認を行い、必要な支援を行った。今年度からのセキュリティ強化に伴い、動作しない箇所が複数確認されたため、飯田キャンパス情報セキュリティセンターと連携し、改善を図った。松波キャンパスと飯田キャンパスとでシステム仕様が異なる点も踏まえ、今後も継続的な連携が必要であると考える。

・附属幼稚園

依頼を受け、ホームページ更新に関する支援を行った。今後、附属学校園のホームページが刷新され、管理体制が変更される予定であることから、附属学校事務と連携しながら、更新および管理の在り方について検討を進めていきたい。

・附属中学校

３年生技術科「AI 技術やプログラミングを用いた授業」を参観した。中学校段階における情報活用能力の育成の実際に触れることで、小学校段階で身に付けさせたい力について示唆を得ることができた。

・附属小学校

児童用 Chromebook および教員用 PC に関する不具合対応や相談、設定調整を行った。また、教員用 PC の入れ替えに伴い、業者との連絡調整や設定状況の確認を行った。加えて、校内に設置している「学びカフェ」の運営を担当した。

今年度より Google サービスを活用し、教職員用の月予定・週予定をデジタルデータで作成・共有できる環境を整備した。

（2）校務のＤＸ化を目指して

・教師用 PC のメールシステム更新および Microsoft365 の導入への対応

附属学校事務と連携し、メールシステム更新に伴う各教職員のソフト移行や更新作業の手順について打ち合わせを行った。また、Microsoft365 導入による利点を整理し、情報共有に努めた。

・アンケートのデジタル化

紙媒体で実施していた「学校評価アンケート（保護者・児童・教員）」「PTA 保護者奉仕活動アンケート」「いじめに関するアンケート（保護者・児童）」等を、Google フォームを用いたアンケートへ移行した。デジタルデータとして集約することで、観点に応じた集計・分析が可能となり、活用の幅が広がった。また、各学年や委員会等で Google フォームを活用する際に、担当教員や児童に対して支援を行った。

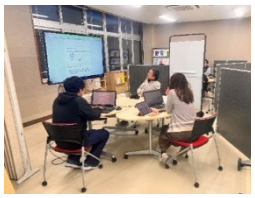
・ＨＰの更新

志願保護者、研究会参加希望者、在校生保護者など、閲覧者を意識した情報発信を心がけた。また、持続可能な更新・編集が行えるよう配慮した。

・ＩＣＴ活用の周知

電子黒板や Chromebook、Google 各種サービスの活用方法について、教職員への周知を行った。

（３）「学びカフェ」の運営



山形大学教員研修高度化事業の一環として、附属小学校に「学びカフェ」を設置している。「学びカフェ」のねらいは、以下三点である。

① 学校マネジメント講座での「学校間ネットワーク」の利用
② 「ゆるやかで・密な」職員間のつながりをつくる
③ 「気軽に・すぐに」情報の受信発信ができる場にする

可動式テーブル、パーテーション、ホワイトボード、大型モニター、卓上モニター、ポータブルモニター、Wi-Fi ルーター、ノートパソコン等を設置し、学年会・教科部会・研究部会などを、開かれた空間でリラックスしながら実施している。また、オンライン環境が整っているため、外部の教育機関や学校との接続も可能となっている。

「学びカフェ」設立から３年目を迎え、普段使いとしての利用頻度が高まり、教科部主催のミニ研修会を臨時に開催するなど、活用の幅が広がった。今後も、気軽に集まり学べる環境づくりを継続していきたい。

２　課題と今後の取組み

- GIGA スクール構想や学校 DX の推進により、教育情報化は一層身近なものとなっている。ハード面・ソフト面ともに多様な手法が示される中で、ねらいに即した選択ができるよう、まずは試行錯誤を重ねる姿勢を大切にしていきたい。また、他校の取組にもアンテナを高く張り、選択肢を広げていく必要がある。
- 今年度は附属小学校内での活動が中心となったが、今後も附属幼稚園・中学校・特別支援学校との連携を継続していきたい。学校園コーディネータとしての役割を一層果たすため、各学校園の取組の視察や、課題の把握・共有に努めていく。
- 情報インシデントを踏まえ、セキュリティ強化に伴う挙動の確認を丁寧に行うとともに、よりよい DX 化に向けた積極的な活用を引き続き推進していきたい。

幼小連絡会

1　ねらい　　年長児の遊びの姿をもとに、架け橋カリキュラムデザインシートを使って話し合うことにより、連続した子どもの育ち・学びについて共に考え、幼小のよりよい接続につなげていく。

2　日時　　令和７年１１月２０日（木）

3　場所　　山形大学附属幼稚園

4　参加者　　小学校：早坂校長・長岡教頭・奥山教務・吉田教務副・
青柳教諭（１年担任）・高橋教諭（１年担任）・庄司養護教諭・
熊倉教諭
幼稚園：伊藤教務・安藤教諭（５歳児担任）・荒井教諭（４歳児担任）・
逸見教諭（３歳児担任）・奥山養護教諭
運営部：山﨑運営副部長
生活科教育共同研究部会：佐藤教授（工学部）・鈴木教諭（附小）
※今年度は、幼小連絡会と生活科教育共同研究部会を合同開催

5　内容

（１）幼稚園の保育参観

（２）話し合い

・５歳児の様子について（架け橋カリキュラムデザインシートをもとに）

・幼小連携の充実に向けて（今後の交流活動の予定確認）

話し合いの様子（一部抜粋）

・一人ひとりのやりたいことを大切にし、保育者も子どもと一緒に楽しむことを心がけている。子ども達は、友達と集って遊ぶ楽しさを体験することができている。

・ステージフェスティバルに向けての活動が始まり、全体での活動が増えている。ステージフェスティバルは、普段の遊びを発表する場となっていて、ホテルごっこの遊びや、県庁見学でエレベーターに乗った体験などが取り入れられている。

・宇宙船を糸で飛ばしたり、小さなピタゴラスイッチのようなロープウェイをつくったり、お互いの遊びを意識して、遊びがつながっている。幼稚園の自由な遊びの中で「実験」が行われており、子どもなりに物の高低・スピードなどを調整しながら自然とその感覚が育っている。小学校以降、それがどのようなことだったのか言語化されたり価値づけられたり位置づけられたりしながら整理されていくのだろう。

・幼稚園教育では、「環境を通して行う教育」が基本となることを再認識した。

6　成果と課題

〇協同性や言葉での伝え合いなど子どもの育ちや、それを下支えする保育者の援助について出し合う中で、子どもの学びにつながる姿や援助などについて話し合いを深めることができた。今後も、幼稚園と小学校の先生が、保育や授業を通して子ども達の姿を共に見て語り合うことを通して、架け橋期における「目指す子ども像」や育みたい資質・能力について理解を深めていきたい。

幼稚園年長児と小学校第１学年児童との交流活動

1　ねらい

　幼稚園：小学校での生活を体験することを通して、わくわくした気持ちを高め、4月からの小学校生活へ意欲と期待をもつ。

　小学校：年長児の思いを考えながら行動することを通して、今年1年間の自分の成長を見つめ、進級することへの思いを高める。

2　日時

　(1)令和8年　2月10日(火)11:30～13:00　給食交流

　(2)令和8年　2月25日(水)10:20～11:30　わくわく小学校体験

3　場所　　附属小学校

4　参加者　附属幼稚園　年長児

　　附属小学校　第1学年児童

5　活動内容

(1)給食交流

　①開会

　　・1年生代表児童よりあいさつ

　　・年長児は3つの教室に分かれる

　　・1年生3～4名と年長児1名でグループをつくり自己紹介

　②給食交流

　　・年長児は、1年生と共に配膳体験

　　・グループ毎に会食

　　・食器の片付け

(2)わくわく小学校体験　※予定

・1年生は生活科「もうすぐ2年生」国語科「小学校のことをしょうかいしよう」等の学習と関わらせて実施

・各教室で年長児と一緒にしたいことや体験してほしいことを話し合い、実施内容を検討

・第一部:1年1組児童との交流

・第二部:1年2組児童との交流

・第三部:1年3組児童との交流

6　成果(○)と課題(△)

＜幼稚園＞

○年長児は、初めて小学校に足を踏み入れ、大変緊張していた子どももいた。しかし、1 年生が丁寧に教えてくれたため、安心してクラスに入ることができた。

○年長児は5年生との英語あそび後の交流だったため、時間的にも無理のない交流で丁度よかった。

○給食を食べ終わった子どもから、「一緒に遊びたい。」という声が自然と上がった。次回の交流につながるものとなった。

○子どもからは、「一緒に給食を食べて楽しかった。」「お土産うれしかった。」といった話があり、

とても喜んでいた。小学校進学への気持ちが高まった。

＜小学校＞

○みのり班などの縦割りの活動の中では、普段世話をしてもらう側のため自分たちがリーダーシップを発揮する側となる芽を育てる機会になった。「立場が人を育てる」場となった。

○年長児にも伝わるように話す経験や、伝わった達成感にうれしそうにする姿が見られた。

○子どもの工夫の余白のある事前指導により、場の状況に合わせて臨機に年長児と関わる姿が見られた。

○「今日一緒に給食を食べた子と同じみのり班になりたい。」といった声が聞かれた。1年生を迎える気持ちを高めることができた。

○「もっと遊びたい。」「もっとかかわりたい。」という思いを高めることができた。次回の交流に向けて、「今度はこれをしてみたい。」「一緒にしたら楽しいだろうな。」という思いを大切にしながら、関わりを今後も増やしていきたい。

△大掛かりな企画や行事でなくとも、回数を増やして、小さく繰り返し関われるようにしていくことに可能性を感じた。

【幼中連携：技術・家庭科交流学習】

園児と中学生の交流学習

1　ねらい

（中学校）

・幼児との遊びや会話などを通してふれあいの楽しさを味わい、幼児に親しみをもつことができる。

・幼児の興味・関心の特徴をつかみ、発達や年齢に合わせた接し方を考えることができる。

・自分を支えてくれた家族や身近な人たちの存在に気づくことができる。

2　日時　　令和7年7月16日（水）　9:00～　9:30（3年2組）
　　10:00～10:30（3年4組）
　　7月17日（木）　9:00～　9:30（3年1組）
　　10:00～10:30（3年3組）

3　場所　　山形大学附属幼稚園

4　参加生徒　山形大学附属中学校　第3学年　133名

5　活動内容

（1）事前学習と準備

・幼児の心身の発達の特徴についての学習

・理解を深めたい幼児のクラス（3～5歳のいずれか）を選択し、交流時の関わり方に関する目標や課題を各自設定。

（2）実習当日

・3～5歳児のクラスに中学生が約 10 名ずつ入り、ままごとや工作、ブロック遊び、絵本、水遊びなど、幼児の活動に混ざって交流した。

6　成果（○）と課題（△）

○3歳児に対しては、短い言葉でゆっくり話し掛け、5歳児に対してはルールのある遊びを一緒に楽しむなど、事前学習を活かして幼児の発達の特徴や個人差を捉え、目の前の幼児の性格や興味関心に合わせて関わろうとする姿が多く見られた。

○実習で気が付いたことや学んだことを、今後の幼児や家族との関わりに活かそうとする振り返りの記述が多く見られた。

△懐かしさや楽しさから、中学生自身が幼児以上に遊びに熱中し、はしゃぎすぎてしまう場面が見受けられた。幼児の活動を支えるパートナーであるという目的意識を持ち、自分の行動が幼児に与える影響を客観的に捉える自律心が必要である。

附属中学校授業参観

1 ねらい　　中学校入学前の児童が授業参観や部活動見学を行うことで、中学校生活に対する心配や不安を軽減し、中学生活への期待をもつことができるようにする。

2 日時　　①11月21日（金） 14：20～15：10 授業参観
②12月10日（水） 14：20～15：10 授業参観

3 場所　　附属中学校

4 参加者　①附属小6年生児童66名（2・3組）
②　〃　児童33名（1組）

5 活動内容　中学1年生から3年生までの全ての授業を参観

6 成果（○）と課題（▼）

○ 児童の興味・関心に合わせて自由に教室を移動し参観できたことで、中学生の学習の様子や授業の雰囲気を感じることができた。また中学校で学習する内容のレベルの高さに驚きながらも、学習意欲を向上させた児童もいた。

○ 中学校進学に関して不安を感じている児童もいたが、中学校の先生方や先輩たちの落ち着いた雰囲気を感じることで、安心している様子が見られた。

○ 授業によっては、児童が中学校の先生や生徒と交流する場面があり、楽しく活動することができた。また、みのり班で一緒だった中学生と出会うと、「元気だった？」「大きくなったね。」などの声をかけてもらう児童も多く、小学校から続く『みのり班のつながり』の素晴らしさを感じることができた。

○ 小学校教員にとっても、小学校を卒業した児童がどのような成長をしているかを実際の姿を通して知ることができ、小学校から中学校へつなぐことの重要性を再確認することができた。

○ 学級閉鎖があった1クラスの参観日を、別日に設定してもらう対応をしていただいた。実際に見学することができて、児童も喜んでいた。

▼ 当日の部活動見学ができなかった。部活動を楽しみにしている児童も多いため、写真や映像を見るだけでもできないか考えたい。

▼中学校の先生からお話をいただけると、中学校生活に関して児童も安心するとともに、進学に際しての心構えや学習準備などの見通しをもちやすくなる。

幼稚園と特別支援学校高等部の交流及び共同学習

1　ねらい

幼稚園

（１）買い物、作業見学などを通して、特別支援学校高等部の生徒と触れあい、親しみをもつ。

（２）いろいろな製品の中から 100 円以内で自分の買いたい物を選んで買う。

特別支援学校高等部

（１）周りの状況に合わせて活動したり、自分の役割を工夫したりして、販売活動や清掃活動に取り組む。

2　日時　　令和７年７月８日（火）９：４５～１０：５０

3　場所　　山形大学附属幼稚園　遊戯室、玄関フロア

4　参加者

幼稚園	年中児	２２名
特別支援学校	高等部	１９名

5　内容

（１）高等部作業学習で製作した製品の販売と購入

（２）部屋の清掃活動と清掃見学

（３）幼稚園で使用しているベンチなど作業製品のメンテナンスと作業の見学

（４）「始まりの会」での製品紹介、「終わりの会」での感想発表

6　成果（○）と課題（▼）

幼稚園

○バザー（買い物）を通して、やり取りをしながら自然な形で関わることができた。残金を見てもらい、まだ買えることを教えてもらったり、つくった人からおすすめの品を教えてもらったりした。

○木工製品のメンテナンスは、どの学年も作業の様子を見学し、きれいになったベンチを見て喜んでいた。

○園の窓ふき作業は、高等部の生徒が行っている様子を見て興味を示した園児が、やり方を教わりながら作業を手伝っていた。「やってみたい、おもしろそう」と思うことがあると、関わりが生まれるきっかけとなると思った。保育室に戻った後、遊びの中でも『お掃除屋さん』になった気分でテーブルふきをする姿が見られた。

○交流を通して幼稚園の友達以外の人と関わる楽しさや、一緒に自分の幼稚園をきれいにする経験を得ることができたと思う。

○木材の端材を、たくさんいただいた。様々な形や大きさの木材をボンドで組み立てたり色を塗ったりして楽しむ姿が見られた。

特別支援学校高等部

○事前学習で、幼児の特徴について学習した上で一人一目標をたてて当日を迎えたことで、販売活動や清掃活動に取り組む中で、なるべく分かりやすい言葉を使ったり、優しい話し方を意識したりしながら関わることができた。また、園児と目線を合わせるために、膝立ちやしゃがむ姿勢になり、笑顔で製品やお金を受け渡したりする姿が多く見られた。

○販売活動では、どれを買うか迷っている様子を見ておすすめの製品を紹介したり、園児が持っている１０円玉を一緒に数えたり、状況に応じて自分にできることを考えて取り組む姿が見られた。

○クリーングループの清掃活動は、園児が興味を持って生徒の話を聞いたり清掃の様子を見たりしてくれたことで、生徒は相手を意識しながら清掃のやり方を手本を見せて伝え、自然とやり取りが生まれ、交流しながらタオルで窓を拭くことができた。

○ベンチのメンテナンスでは、ベンチを園児から直接受け取ったり、メンテナンスが終わった製品を室内まで運んだりすることで、園児の喜ぶ様子を見たり直接お礼を言われたりし、達成感や責任感を感じながら交流することができた。

▼来年度は、作業グループが変更になるため、活動内容や時期について情報交換しながら検討していく必要がある。これまでのように、相手を思いやりながら、自然と交流できるような活動内容にしていきたいと考えている。

小学校と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1　ねらい

小学校

（1）特別支援学校の児童と活動し、相手の気持ちを受け止めながらたのしく活動するために必要なことが分かる。

（2）特別支援学校の児童と気持ちや考えを伝え合って、自分にできることを考え工夫することができる。

（3）特別支援学校の児童との様々な活動を通して、関わりの中で自分ができることをふやそうとする。

特別支援学校小学部

（1）附属小学校の児童と活動し、活動を共にする楽しさや活動に必要なことが分かる。

（2）附属小学校の児童と気持ちや考えを伝え合って、選択や決定をしながら共に活動する。

（3）附属小学校児童と様々な活動を通して、相手とよりよく関わりながら、自分の考えを深めようとする。

2　日時　※時間は全て１０：２５～１１：２５

1回目：　5月２０日（火）　2回目：　6月　４日（水）　3回目：　9月２５日（木）

４回目：１０月１４日（火）　5回目：１０月２８日（火）　6回目：１１月１２日（水）

※事前学習としてオンライン交流、事後学習として感じたことや学んだことなどについて振り返りを行ったり、手紙のやり取りをしたりした。

3　場所

１、３、５回目：特別支援学校、２、４、６回目：小学校

4　参加者

小学校　第３学年児童１組、２組、３組　　８５名

特別支援学校

小学部児童１組（１・２年)、２組（３・４年)、３組（５・６年）児童　　１５名

5　内容

1回目	仲良くおどろう（ダンス)、絵の具を使った制作、描いたり切ったり貼ったりする制作活動など特別支援学校が企画した活動
2回目	「ドレミ」であそぼう～ベルハーモニー演奏を楽しもう～（音楽） 楽器を演奏したり、歌を歌ったりする活動
3回目	仲良くおどろう（ダンス)、楽器を演奏しよう、描いたり切ったり貼ったりする制作活動など特別支援学校が企画した活動
4回目	友達と協力して楽しく体を動かそう（体育） 手つなぎフラフープ、フラフープ渡り、手つなぎ風船バレーなど
5回目	仲良くおどろう（ダンス)、リズムをつくろう（音楽)、粘土での制作活動など特別支援学校が企画した活動
6回目	葉っぱの世界に飛び込もう！（図工)、秋の自然を使った制作活動

6　成果（○）と課題（▼）

小学校

○各学級とも、１回目の交流は、緊張した表情でスタートしたが、活動をしながら、徐々にペアの友達に自分から関わろうとする姿が見られ、２回目の交流に向けて相手意識を働かせて準備する姿が見られた。

○２回目の交流に向けての活動や当日の活動で、ねらいにつながる姿がたくさん見られた。

○事前のオンライン交流は、相手の様子を知ることや活動の見通しをもつことにつながり、当日の主体的な活動の支えとして、とても効果的だった。

○互いのよさを分かり合えるようになることと、学びを活かすことを意図し、「一緒に楽しむ」、「一緒に学ぶ」授業を行った。授業の中で、子供が、「相手のことを思い、自分にできることを考え、やってみる」ことができるよう、グループ別の活動を取り入れた。　音楽、体育、図工では、普段の授業に一緒に取り組む形の可能性が見えた。

●深まりをねらうならば、年間を通して同じペアで交流をする実施の仕方も考えられる。（実際に行き来することが難しい場合は、学習で取り組んだ歌、合奏、作品、楽しかったこと、がんばったことなどを紹介し合う定期的なオンライン交流など。）

特別支援学校小学部

○小学校の子供たちが、「何かをしてあげる」ではなく、「仲良く」をキーワードに一緒に楽しむ姿や、自然に関わる姿が見られた。

○本校、附属小学校共に、たくさんの笑顔が見られ、楽しく交流できた。

○グループで一緒に考える中で担当したい楽器や作りたい物、順番決めなどの選択や決定を行うことができた。

○各回、事前のオンライン交流と実際の交流がセットで行われたので、児童も見通しがもて、より相手意識をもちながら活動できた。また、本校での回は、これまでの学習内容を基に設定したので、より児童が見通しをもって活動できた。

●本校の児童の実態から、使用する教材などについて事前に詳しく確認ができるとより安全に実施できると感じた。

●時期としては、３回目以降が立て続けにあり、慌ただしさがあるが、教育実習やそれぞれの行事などを考えると仕方ない。

＜活動の様子＞

「オンライン交流」

「仲良くおどろう」

「ドレミであそぼう」

「絵の具を使った制作」

「楽しく体を動かそう」

「葉っぱの世界に飛びこもう」

附属中学校と附属特別支援学校中学部の交流及び共同学習

1 ねらい

中学校

（1）附属特別支援学校の生徒との交流を通して、インクルーシブの視点などを理解し、相手を尊重しながら協働していく大切さを知る。

（2）附属特別支援学校の生徒と一緒に活動することを通して、互いに教え合ったり認め合ったりしながら主体的に関わろうとする態度を養う。

特別支援学校中学部

（1）附属中学校の生徒と活動する中で、相手のことを知ったり、活動を共にする楽しさや必要なことが分かったりする。

（2）附属中学校の生徒と気持ちや考えを伝え合ったり、動きを合わせたりして共に活動する。

（3）附属中学校の生徒と様々な活動を通して、相手とよりよくかかわりながら、自分の考えを深めようとする。

2 日 時　　令和7年11月27日(木)

3 場 所　　附属中学校 体育館

4 参加者　　中学校 2年生 生徒　　117名

特別支援学校 中学部生徒　12名

5 内 容

事前事後の学習	＜中学校＞ ・特別支援学校との交流学習に向けて、生徒から有志を募りプロジェクトチームを立ち上げた。 ・交流学習の具体的な内容や当日の運営等について、プロジェクトチームのメンバーが原案を立て、特別支援学校の生徒と打ち合わせをしたり、学年集会で原案の提案を行ったりした。 ・当日の運営もほとんどの部分をプロジェクトチームの生徒を中心に行った。 ・当日、直接交流ができなかった生徒は、インクルーシブ教育や山形県の福祉政策などについて調べてレポートにまとめた。 ・事後は学年集会を行い、今回の交流学習の成果と課題についてまとめた。 ・交流学習を終えての感想を掲示物としてまとめ、特別支援学校に届けた。 ＜特別支援学校中学部＞ ・事前学習として、自分たちが学習したもので附属中学校の生徒と一緒に活動できそうなものは何か考える機会を設定した。 ・中学校のプロジェクトチームのメンバーとオンラインで顔合わせやお互いの活動案を提案し合い活動内容を決めていくことで、期待感をもって取り組めるようにした。 ・事後学習では、グループでの活動を振り返って感想を伝え合った。

当日の学習	前半:ちぎり絵（中学校案） 3グループに分かれて、貼り方や色を相談し合いながら、下絵に色を付けていった。 後半:ボッチャ(特別支援学校案) 3グループに分かれて、ボッチャのゲームやターゲットボッチャの体験を行った。

6　成果(○)と課題(▼)

中学校

○プロジェクトチームが中心となり様々な立案をしたことで、生徒が主体的にインクルーシブの視点を学び、交流会を運営したり、レポートをまとめたりすることができた。

○事前にリモートで生徒同士が、交流学習の内容について打ち合わせを行うことで、お互いの距離感が縮まり、共に交流学習を作り上げようとする意識を高めることができた。

○温かい雰囲気の中で、当日の交流学習を行うことができた。ちぎり絵の活動では一緒に作品を作り上げることで中学校の生徒と特別支援の生徒が連帯感をもつことができた。

○まとめの学年集会を通して、生徒自身が今回の交流学習の意義やこれから学びたいことを具体的に考えることができた。

▼中学校の生徒人数と特別支援学校中等部の生徒の人数が大幅に違うことを踏まえて、早い時期から具体的な対応を検討することが必要だった。

特別支援学校中学部

○同世代の友達と共に活動してよりよく関わるというねらいから、自己紹介や双方で活動案を出し合ったちぎり絵とパラポーツのボッチャを行った。今年度も小グループで活動したことで、ちぎり絵の制作では、中学校の生徒と作り方を相談したり、協力したりする姿が見られた。ボッチャでは、友達を認め合ったり、応援したりする姿が見られた。

○事前学習で、自然に関わり合い、交流するにはどのような活動だとよいか考える際には、保健体育の学習で行ったパラスポーツのボッチャが一緒に活動して楽しめるのではないかと他者意識をもって考える姿が見られた。

▼ 年度初めに双方のねらいを確認したが、ねらいや活動内容の十分なすり合わせが足りず、一部の中学生との活動になった。今年度のうちに双方のねらいを確認し、中学校と連携しながら時期や進め方、活動内容を検討し、双方の生徒にとって有意義な交流及び共同学習ができるように計画していく。

＜活動の様子＞

ちぎり絵

パラスポーツ（ボッチャ）

Ⅱ　研究・連携推進委員会規程

○山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程

平成28年4月1日

(設置)

第1条　山形大学附属学校運営規程第8条の規定に基づく附属学校運営会議の専門委員会として，山形大学附属学校研究・連携推進委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(目的)

第2条　委員会は，附属学校における研究を推進し，かつ，附属学校間の連携を推進することを目的とする。

(審議事項)

第3条　委員会は，次に掲げる事項を審議する。

(1)　大学と各附属学校とが連携した教育研究及び実証の推進に関する事項

(2)　公開研究会及び大学と各附属学校との共同研究に関する事項

(3)　附属学校間の連携の基本的方針に関する事項

(4)　附属学校合同研修会に関する事項

(5)　幼小連絡会及び小中連絡会に関する事項

(6)　その他前条に規定する目的を達成するために必要な事項

(組織)

第4条　委員会は，次に掲げる委員で組織する。

(1)　附属学校運営部長

(2)　附属学校運営副部長(研究担当)

(3)　附属学校運営副部長(教育実習担当)

(4)　主担当教員として地域教育文化学部に配置された教員の中から選出された者　3人

(5)　主担当教員として大学院教育実践研究科に配置された教員の中から選出された者　1人

(6)　附属学校の校長(幼稚園にあっては園長。以下「附属学校長」という。)

(7)　附属学校の教頭

(8)　各附属学校研究部長

(9)　その他委員会が必要と認める者

2　前項の第4号，第5号及び第9号に掲げる委員の任期は，2年とする。ただし，委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は，前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条　委員会に委員長を置き，前条第1項第1号に掲げる委員をもって充てる。

2　委員長は会務を掌理し，委員会を代表する。

3　委員長に事故があるときには，前条第1項第2号に掲げる委員がその職務を代理する。

（会議）

第6条　委員会は，委員長が招集する。

2　委員会は，委員の過半数が出席しなければ，会議を開き，議決することができない。

3　委員会の議事は，会議に出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは，委員長の決するところによる。

4　前項の場合において，委員長は，委員として議決に加わることができない。

5　委員長は，審議結果を山形大学附属学校運営会議に報告しなければならない。

（部会）

第7条　委員会の下に，次の3つの部会を置く。各部会の運営に関し必要な事項は，別に定める。

(1)　共同研究推進部会

大学と附属学校の共同研究について計画し，実施する。

(2)　幼・小・中連携部会

附属幼稚園，附属小学校及び附属中学校の連携について計画し，実施する。

(3)　特別支援連携部会

附属特別支援学校とその他附属学校の連携について計画し，実施する。

（事務局）

第8条　委員会に事務局を置く。事務局は各附属学校の教頭が持ち回りで担当し，委員会運営に必要な庶務を行う。

（その他）

第9条　この規程に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，委員会が定める。

附　則

1　この規程は，平成28年4月1日から施行する。

2　次の規則は，廃止する。

(1)　山形大学附属学校研究推進委員会規則（平成17年3月7日制定）

(2)　山形大学附属学校連携委員会規則（平成21年6月1日制定）

Ⅲ　資料

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める部会に関する申合せ

平成 31 年 4 月 24 日
附属学校研究・連携推進委員会

１　目的

この申合せは，山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める「共同研究推進部会」，「幼・小・中連携部会」及び「特別支援連携部会」の各部会の運営について，必要な事項を定めるものとする。

２－１　共同研究推進部会

⑴ 大学と附属学校の共同研究を推進することを目的とし，大学教員及び附属学校教員で構成する。

⑵ 共同研究推進部会は，次の研究部会で構成する。

国語教育	社会科教育	算数・数学教育
理科教育	音楽教育	造形美術教育
保健体育教育	家政教育	外国語教育
幼児教育	道徳教育	生活科教育
特別支援教育	養護	学校外教育
ＩＣＴ教育	インクルーシブ教育	英語教育
ＳＤＧｓを踏まえた教育		

⑶ 研究部会への所属については，原則として年度初めに附属学校研究・連携推進委員会において確認する。所属確認は，附属学校教員または大学の同部会員の推薦と本人の同意に基づいて行う。

⑷ 地域教育文化学部及び教育実践研究科の教員はいずれかの研究部会に積極的に所属するものとする。附属学校教員は，原則としていずれかの研究部会に所属するものとする。地域教育文化学部以外の教員についても，研究部会員の推薦に基づいて研究部会に所属することができる。

⑸ 各研究部会は２人以上で構成し，各研究部会に大学教員の中から選出した部会長１人を置く。ただし，ＩＣＴ教育，インクルーシブ教育，英語教育及びＳＤＧｓを踏まえた教育の研究部会にあっては，附属学校教員の中から選出した部会長１人を置くものとする。

⑹ 研究部会の設置及び改廃等に関する事項は，附属学校研究・連携推進委員会において決定する。

⑺ 各研究部会は，年度当初に研究テーマを決定の上共同研究を行い，年度末に附属学校研究・連携推進委員会に研究結果報告を行うものとする。各研究部会の研究テーマは，各附属学校の公開研究会のテーマと関連した研究テーマや，他の主体的研究テーマとする。

⑻ 研究部会に所属する大学教員は，各附属学校の公開研究会において，指導助言者ではなく，共同研究者として積極的な役割を果たすものとする。

２－２　幼・小・中連携部会

⑴ 附属幼稚園，附属小学校，附属中学校の連携について具体的に計画し，実施することを目的とする。

⑵ 幼・小・中連携部会は，附属学校運営副部長（２人），学部選出の研究・連携推進委員会委員（１人），幼・小・中の各教務主任（３人），コーディネータ（４人），各研究部長（４人）で構成する。

※座長は，研究担当の附属学校運営副部長が務める。

⑶ 部会の開催は，議題に応じて，次の方法のいずれかとする。

⑷ 附属小学校を主幹校とし，作業部会の議題の整理，会議の案内，進行等を務めるものとする。

２－３　特別支援連携部会

⑴ 附属特別支援学校と幼・小・中との連携について具体的に計画し，実施することを目的とする。

⑵ 特別支援連携部会は，附属学校運営副部長（２人），学部選出の研究・連携推進委員会委員（１人），幼・小・中・特の各教務主任（４人），コーディネータ（４人），各研究部長（４人）で構成する。

※座長は，研究担当の附属学校運営副部長が務める。

⑶ 部会の開催は，議題に応じて，次の方法のいずれかとする。

⑷ 特別支援学校を主幹校とし，作業部会の議題の整理，会議の案内，進行等を務めるものとする。

ⓐ 研究・連携推進委員会と同日開催（研究・連携推進委員会終了後に開催）

ⓑ 研究・連携推進委員会と別の日に開催（幼・小・中連携部会＋特別支援連携部会の連続開催）

ⓒ 研究・連携推進委員会と部会の合同開催

附　則

この申合せは，平成 31 年 4 月 24 日から施行する。

附　則

この申合せは，令和 4 年 4 月 1 日から施行する。

附　則

この申合せは，令和 5 年 6 月 7 日から施行し，令和 5 年 4 月 1 日から適用する。

山形大学附属学校研究・連携推進委員会委員名簿

（令和７年４月１日現在）

	氏　　名	現　　職
委員長（1 号委員）	三　浦　登志一	附属学校運営部長
委　員（2 号委員）	山　﨑　義　光	附属学校運営副部長
委　員（3 号委員）	澁　江　学　美	附属学校運営副部長
委　員（4 号委員）	佐　藤　博　晴 坂　本　明　美 菊　田　尚　人	地域教育文化学部教授 地域教育文化学部准教授 地域教育文化学部講師
委　員（5 号委員）	高　山　琢　磨	大学院教育実践研究科教授
委　員（6 号委員）	高　梨　明　恵 早　坂　和　重 加　藤　咲　子 森　谷　久　美	附属幼稚園長 附属小学校長 附属中学校長 附属特別支援学校長
委　員（7 号委員）	長　岡　初　美 斎　藤　善　行 鈴　木　晶　子	附属小学校教頭 附属中学校教頭 附属特別支援学校教頭
委　員（8 号委員）	逸　見　宗　史 佐　藤　大　将 矢　作　創　己 岩　井　大　知	附属幼稚園研究主任 附属小学校研究部長 附属中学校研究部長 附属特別支援学校研究主任
委　員（9 号委員）	伊　藤　真由美 奥　山　恭　平 大　隅　一　浩 八　鍬　洋　祐 藤　本　沙　織 山　路　一　哉 中　村　優　太 （奥　山　恭　平）	附属幼稚園教務主任 附属小学校教務主任 附属中学校教務主任 附属特別支援学校教務主任 特別支援教育コーディネータ メンタルケアコーディネータ 英語教育コーディネータ 教育情報化推進コーディネータ

※4 号，5 号及び 9 号委員の任期は 2 年（R6.4.1～R8.3.31）

編集後記

幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の４校園が設置された附属学校の強みを生かしたこの連携活動は単なる異年齢・異校種間の体験活動にとどまらず、子供たちが多様な他者と関わりながら学び合い、社会性を育む大切な機会となっている。

これらの貴重な体験が「行事」や「一度限りのもの」として終わるのではなく、各校園の学習のねらいを明確にした計画的な取組として位置付けることが大切であると考える。

また、インクルーシブ教育システムの理念のもと、特別支援学校との共同的な学びを通して、多様な学び方を自然に理解し合える環境を整えることがますます重要になっている。今後も教職員間の連携や情報共有の仕組みづくり、ICT の活用など学校の枠を超えた協力体制が求められる。

子供たちには、異なる背景を持つ仲間と出会い、ともに学ぶ経験を通して、自分のよさに気付くとともに、他者を受け入れる心を育んでほしい。今後も相互に協力し、一層の推進を図っていきたい。

令和７年度　附属学校研究・連携推進委員会事務局
附属特別支援学校　教頭　鈴木　晶子

令和７年度
附属学校連携活動報告書

発　行　日：令和８年２月２８日

編集・発行：山形大学附属学校研究・連携推進委員会
〒990-0023　山形市松波二丁目７－２

－本報告書の無断複製及び改ざんを固く禁じます－